

「わが父・鄧小平」は 健在なり

サンデー

94.5

No.47

矢吹晋



発売中の「わが父・鄧小平」I・II巻

——毛毛さんとお会いすることができてたいへん光栄です。

実は私は一九九二年十一月に、あなたにお会いしたことがあります。日中国交正常化二十周年を記念して、お国から大型代表団が来られたとき、私もある分科会(国会議員分科会)に参加しました。その関係で、十一月十七日に東京プリンス・ホテルで開かれたパーティーに招かれたのです。ただ、あのパーティーは大盛会でしたし、あなたは大勢の日本人から挨拶を受けていたので、おそらくご記憶にはないと思います。が……。ところでこの本(『当代中国的掌舵人』——鄧小平(中央文献出版社、張惠才編訳、一九九三年十月刊)には、私が以前書いた論文

が訳されて収められています(『鄧小平体制の確立』(国際問題)一九八六年一月号、日本国際問題研究所)。
毛毛 なるほど、これは頂戴してもよろしいのですか。
——いえ、これは中国の友人が届けてくれたもので、一冊しかないのです。すみません。あなたの『わが父・鄧小平』と同じく、中央文献出版社から出ています。
毛毛 じゃあ、簡単に入手できます。

——「わが父・鄧小平」を読むと、読者はいろいろこの本について、あるいはこの本を書いた毛毛さんについて、あるいは鄧小平さんご自身について、もう少し知りたいと思うわけです。そこで、私が読者に代わって毛毛さんにいろいろ質問する、ということにしたいと思います。

最初にこの本のことについてお訊ねします。まず、この本をお書きになった動機です。なぜお父さんのことを書くことが、そうした人生について書き残しておきたい気持ちがあるに強かったのです。また、私は非常に歴史が好きです。父の人生は中国の歴史や大きな事件と非常に強くかかわっています。それを近くで見ることができたので、その一部始終を伝えたいという気持ちもありました。

父の伝記については、大陸、香港、台湾、あるいは他の国でもすでに出版されたものがありますけれども、それらを見ると、歴史の事実と合わないところもありますので、そういうところについて真実はこういうことだったのだ、とハッキリ書きたかったので。もちろん、父自身は、「自伝は書かない」と言っていますし、また、父の伝記あるいは人生については中国政府あるいは中国共産党からいざれ正式な文書が公にされると思いますが、ただ私は父の側にずっと付き添っていて、やっぱり他人では知り得ないことがありますので、そういうところについても書きたいと思ったのです。

それから、私が書いたものについての父親の反応ですが、父は先ほども言いましたように自伝は書かないと決めています。何故かという点、自分で自分のことを書くということ、自分や歴史を客観的に評価するということは大変難しいからです。もちろん、非常にいい自伝を書いた人もいますけれども、大半の人は自分について客観的に見ることはなかなかできない。それで、自伝を書きたくないと言っていたわけです。それで、私は父に代わってこの伝記を書くことにしました。私の家族はわりと民主的ですので、たとえば子供たちが

「わが父・鄧小平は健在なり」



インタビューに答える毛毛さん

にしたのか。それから、この本を書くことに対してお父さんはどういう態度だったでしょうか。
毛毛 動機については、本の中でも多少触れていますが、主にふたつあります。第一は、娘としての親孝行の気持ちからです。もうひとつは、父は中国で重要な位置を占めている人物だと思えますが、私はいろいろな事件あるいは物事に立ち会った者として、歴史的な事件、あるいは変動を記録しておきたいという気持ちもありました。また中国の一人の国民として、ひとつの国の指導者を理解するという立場からも書きたいと思いました。

この本を書くという気持ちは十年前からありました。父の人生は波乱万丈で、大きな歴史とともに歩んできました。



今年2月上旬、上海で春節（旧正月）を過ごした時の鄧小平一家。左から長男・鄧煥方、上海市党委書記・吳邦國、二女・鄧暉、鄧小平、三女・鄧瑩（毛毛）、夫人・卓琳、上海市長・黃菊、長女・鄧琳。二男の鄧買方だけ不在（敬称略）

どういふ仕事をしているかということについては、父はあまり関与しません。「みな一所懸命仕事をするように」とは指示しますけれども、あまり口出しはしません。で、私はこれを書く前、あるいは資料を集めたり書き始めるとき、父には何も言いませんでした。もちろん、書いている間に知られてしまいましたが、私は正式に意見を求めていませんでしたので、父としてもそれを知った段階で何も言いませんでした。書き終わってから父のところへ持っていったら、それを読んでこういう評価がくだりました。「書かれていた内容は真実に近く、感情をこめて書いてある」（原文＝写得真実、比較感情）と。私はそう言われてとても嬉しく思いました。というの、これを書いているとき、父がこれを読んで「悪くない」（原文＝還不算糟）と言ってくれば、もう満足だと思っていたからです。そうしたら、「真実に近く感情がこもっている」と言ってくれましたので、非常に喜んでいました。——だいたい厚い本ですが、お父さんは何日ぐらいかけて読みましたか。それと、お父さんが気に入ってくれるかどうか、毛毛さんが一番心配したところはどこでしょうか。毛毛 父は毎日少しずつ読んでいますが、全部でたぶん半月ぐらいたったでしょうか。

るうちに少しずつ自信が出てきたということですが、その意味ではこの本全体のレベルが高いものになるかどうか、それは最後まで心配でした。

また、この本では父の家族、そしてフランス留学、第一回の失脚、共産党の大きな歴史的事件、さらに三回にわたる結婚のことを書いていますが、こういうことについては、中国でもハッキリ書いているものがあると思いますので、私がそれをきちんと客観的に把握できるかどうか、自信はありませんでした。その意味で、父がこれを読んでどういう評価をくだすかという点についてはやはり非常に心配しました。

この本を書くにあたっては、歴史的な事実だけを書くのではなくて、自分の感想あるいは評論も入れていきますので、それを父がどう受け取るか、そのことについても自信はありませんでした。

——いま、鄧小平さんの三回の結婚のことが話題に出ましたが、最初の奥さんは張錫瑗さんですね。で、彼女のことを調べるために、毛毛さんは鄧超麟さんにインタビューしているわけです。彼は確かトロツキストであったはずですが、そのことは問題になりませんでしたか。

毛毛 鄧超麟さんにインタビューするとき、私は政治的なことあまり興味はなかったもので、そういうことは話しませんでした。張錫瑗媽媽のことについてだけ聞きまして、それについていろんなことを教えてもらいました。鄧超麟さんは父とフランス留学時代の仲間ですので、やっぱり非常に親切でした。何ら政治的な問題は起こりませんでした。

——では、鄧小平さんのことに話題を移したいのですが、新聞は毎日十数紙読む。それから読書も大変好きだと聞いています。それからこの本には、歴史の『二十四史』『資治通鑑』、そういう本をお読みになつていられると書かれています。他にどのような本を鄧小平さんはお好きなのでしょう。毛毛 父は歴史に非常に関心がありますので、歴史書を読むのがとても好きです。中国の歴史書だけでなく、中国語訳のいろんな本も読みます。たとえば文学作品でいえば、フランスのヴィクトル・ユゴー、アレキサンドル・デュマ、ロシアのトルストイ、チェーホフ、ドストエフスキー……。それからロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』も愛読書です。それ以外には伝記も好きです。たとえばフランスの大統領だったド・ゴールの『回想録』。父は特に第二次世界大戦に関するいろんな政治家の回想録が好きそうですね。たとえば旧ソ連のジュエフ元帥の回想録です。日本の本では井上靖の『孔子』も読んでいました。もちろん中国語に翻訳したものですけれども。

——鄧小平さんは昔、フランスに留学していたわけですが、フランス語はいまどの程度覚えているのでしょうか。毛毛 たぶん、全部忘れていていると思います（笑）。フランス留学時代は、フランスにいても中国の革命のためにいろんな仕事をしていましたし、アルバイトもしていました。で、中

国人の共産党グループにいましたので、フランス語の力は周恩来総理ほどではないと思います。私たちが小さいとき、周恩来総理がフランス語を話すのを聞いたことはありませんが、父がフランス語を喋るのは聞いたことがあります(笑)。

——ただ、一九七四年、ニューヨークでの国連総会に参加した帰りにフランスへ寄って、クロワッサンをたくさんお土産に買ったりにしていますね。一方、鄧小平さんは、芝居は京劇がお好きで、スポーツはサッカーがお好きだ。つまりフランスや外国の文化にも関心がおありのように見受けられますが、中国の文化とフランスの文化は鄧小平さんの中でどういうふうな「平和共存」しているんでしょうか(笑)。

毛毛 外国の文化と中国の文化が共存するのは、とてもやさしいことだと思います。優秀な文学作品、あるいは文化・文明というのは国境を超えて人類が共有できるものだと思うからです。

父は十六歳でフランス留学をしました。つまり、幼少年時代は中国の文化の中で生活しまして、青年期……十六歳から二十三歳まではフランスで生活しました。青年時代の大事な時期に外国で生活したということで、外国の文化に親しみを感じているということは非常にあると思います。

——そこをお聞きしたかった。というのは、中国共産党の中には「フランス留学組」、たとえば周恩来とか陳毅、聶榮臻、鄧小平さんもちろんですが、そういう、わりあいオープン・マインドな人たちが多いと思います。これに対して毛沢東の

ところで、鄧小平さんはわりあい小柄ですね。それで思い出すんですが、ヨーロッパの人たちはナポレオンと鄧小平さんと「どっちが背が低い」と言っているんですけども(笑)、ドイツのフランツという人が書いた鄧小平さんについての本(Uli Franz, Deng Xiaoping, Harcourt Brace Jovanovich, 1987)では「四フィート一インチ」とあって、背がナポレオンと同じぐらいだと言っているんですが、私がお聞きしたのは身長のことと、ナポレオンとの比較です。

毛毛 すみません、四フィート一インチというのは……？

——だいたい一五〇センチです。

毛毛 父は一六二センチです(笑)。私とほぼ同じぐらいの身長です。もともと、父は年をとったので少しは低くなった(笑)。ですから、いま並んだら、父の方が低いと思います。

——それならナポレオンより少し高いと思います(笑)。ところで、鄧小平さんが尊敬する人物は誰でしょうか。

毛毛 毛沢東主席と周恩来総理です。

——外国人では？

毛毛 憧れたり尊敬する外国人というのは、聞いたことがあります。ただ、父はマルクス主義を信じていますし、ロシアで勉強したこともあり、たぶんマルクスとレーニンに対しては非常に尊敬していると思います。

——ところで、毛毛さんは、毛沢東について「マルクス主義に理想主義を加え、共産主義、民族主義に、いささか封建的色彩も帯びている」という評価をしています。それではこの

場合はずっと中国だけにいたから、どうも視野が少し狭いと、私は思います。

毛毛 人間はいろんな見聞を広め、体験をします。それが多いほど、その人にとっては得るところが多いと思います。たとえば、周恩来総理や父といった、フランス留学の経験のある中国共産党の指導者たちは青年期をヨーロッパで過ごしたことで、普通の人たちより資本主義社会に対する認識が深くなっていると思います。父たちが留学した時代は、中国社会は非常に貧しくて遅れていて、反封建、反植民地時代でしたので、そういう社会を実感している。その一方、今度は資本主義のフランスで外国人労働者として働き、やっぱり圧迫と搾取を受けたと思います。それで資本主義の悪いところも実感したと思います。もちろんヨーロッパ資本主義のいいところもよく知っているといます。

その当時の留学というのは、ヨーロッパに真理を求めために行きました。その頃の人たちは海綿のようなもので、海綿が非常によく水を吸収するように、ヨーロッパの思想や哲学、先進的な技術を吸収しました。中国人民、中国社会のためいろいろなことを吸収した世代です。父の現在の考え方、やり方というのは、こういう留学の経験と非常に密接な関係があると思います。

——その見方に私も賛成です。鄧小平さんは資本主義についての認識が的確であり、他の共産党の指導者と比べて非常に視野が広いと、私も感じています。

同じ方式で鄧小平さんを評価すると、どういうことになりそうですか(笑)。

毛毛 まず、マルクス主義者です。次に中国を豊かな国にしたいという考えを生涯の目標にしていますので、その意味では理想主義者でもあると思います。毛沢東主席と比べると、ロマンティックなところは少ないと思います。そのかわり、父はもっと現実主義者で、事実をもっとものを考えて行動するという側面は強いと思います。そして父の大きな特徴のひとつは、年はどんどんとっていくけれども、考え方は老化していないということ。原則をもちながらも臨機応変に現実に対応できるという点は優れていると思います。よく言われるように「白猫でも黒猫でもネズミをつかまえればいい猫だ」(笑)というような考え方ですね。

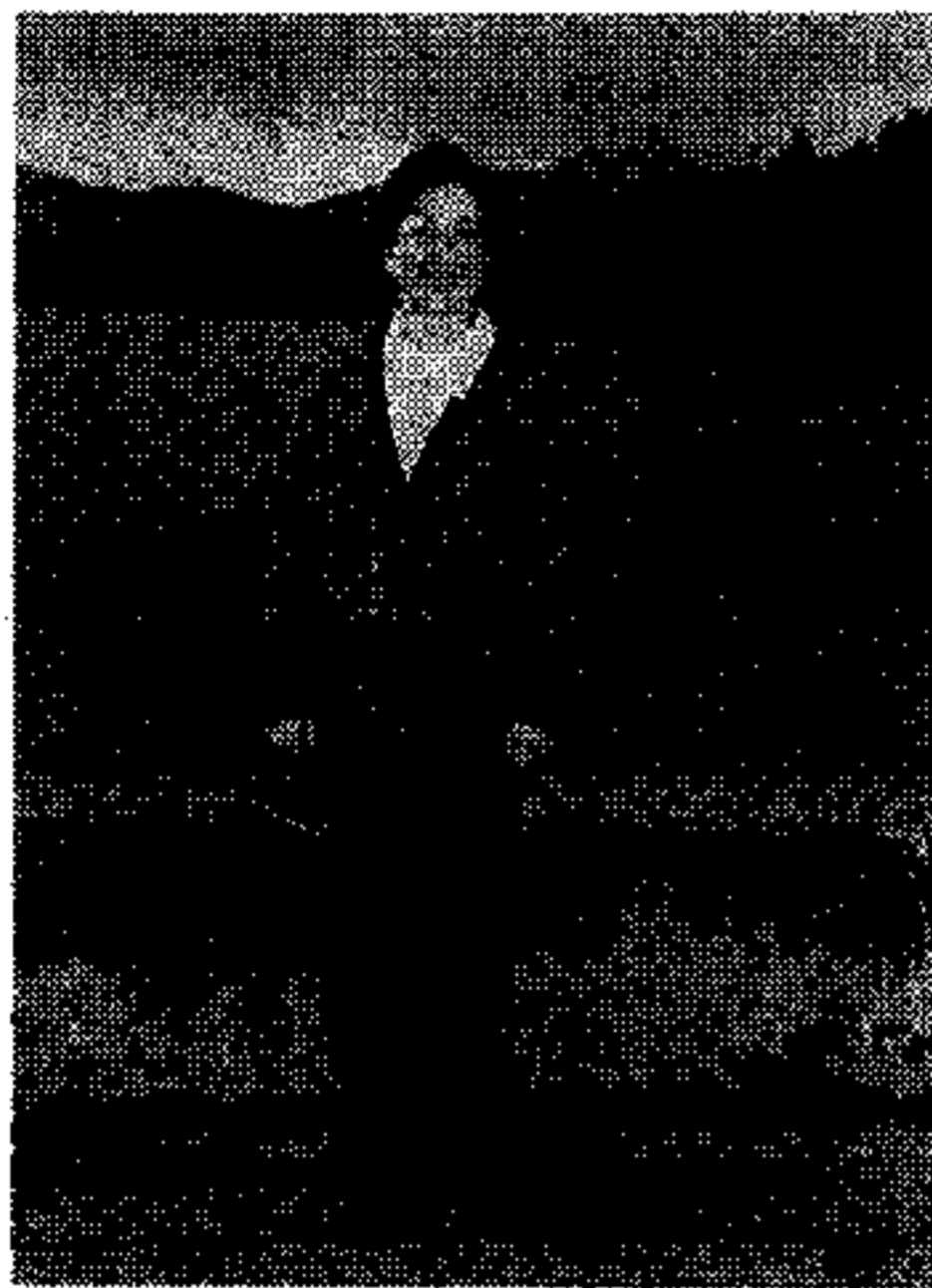
——あれは四川省の諺だと聞いたことがありますけれども、家庭の中で鄧小平さんがそういうことを言ったことはありますか。

毛毛 黒猫白猫の話は、劉伯承(一八九二—一九八六、元第二野戦軍司令員)が戦争のとき、「こういう戦略で戦いましょう」と言ったのが最初だと聞いています。父はこの言葉を借りて、中国の経済建設について語ったのです。ですから、家庭の中ではこういう言葉を使ったことはありません。

——では、鄧小平さんには「封建的色彩」はありますか(笑)。

毛毛 基本的にはないと思います。

——それは若いときにフランスに留学して、フランス革命の



東の國の休日を楽しむ (箱根、声の湖畔で)

精神を吸収したからですか。

毛毛 それは非常に関係があると思います。でも、唯一の理由ではないと思います。もともとが専制的、カリスマ的な考え方をもつ人ではないからです。仕事をやるうえでも非常に民主的なやり方をします。ですから、いろんな意見を聞くことを重視します。家庭でも民主的な雰囲気です。

私の家庭は、両親の子供だけではなくて、叔母さん、つまり父の姉妹の子供たちも私たち家族と一緒に生活しました。私は子供が好きですので、小さい子供たちと大勢で暮らすのが楽しいのです。

*

——ところで、毛毛さんには印税がたくさん入ると思うんですけども(笑)、使い途は考えていらっしやいますか。

毛毛 中国では本代は安い(『わが父・鄧小平』は二三元八〇銭〓約一七〇円)ので、たいした収入にはなりません。でも、日本など外国の印税は高いので、それは娘がいますから……。

——羊羊さんですね。

毛毛 はい。羊羊のアメリカ留学の学費にしたいと思えます。主人も私も公務員で、中国の公務員の給料は安いですから、子供の教育のために使いたいと思います。

——私が読んだ新聞では、お父さんが「モデル料をほしい」と言っていたとか。

毛毛 アハハ。本の印税は公務員以外の収入ですから、父が

——賀平さんはいまどんなお仕事をしているんですか。

毛毛 軍人です。中国人民解放軍総参謀部の装備部の部長で、少将です。

——毛毛さんは全国人民代表ですが、どの単位を代表していますか。解放軍代表と聞いたことがありますか、毛毛さんも軍籍はあるんですか。

毛毛 そうです。いまは軍隊で仕事はしていませんけれども、軍籍は残っています。

——階級はどのくらいですか。

毛毛 大校(大佐相当)です。軍隊で働いていないで軍籍をもっているというのは、ひとつの経緯があります。というのは私は一九七五年、北京医学院を卒業しましたが、その当時

笑いながら「私にも何か払ってほしい」と言ったことはありました。もちろん冗談ですが、本業以外の収入なので「これを節約することを忘れてはいけません」と言われました。

——このたびの訪日で、お父さんに何かお土産は買って帰りますか。

毛毛 印税が入ったから買うのではなくて、いつも買っていますから……。私のきょうだいはみんな親孝行ですので、両親の着ているものとか、使っているものは全部きょうだいが作ったり買ったりしたものです。

——ご家族のことをもう少し聞きたいのですが、毛毛さんはご主人の賀平さんとどういふ形で知り合ったんですか。

毛毛 アハハハ。とてもロマンティックな話で、それについては下巻で詳しく書こうと思います(笑)。一九七二年のことです。私は下放で農村で働いていました。彼は湖南省の農場で働いていました。彼も批判された家庭の子弟(原文「黒刺子弟」)でしたので、農場で働いていたのです。

私は陝西省の西の方の農村にいました。彼は湖南省の農場です。非常に遠く離れていましたが、私たち二人のことを知っているある友人が「お似合いだ」といって紹介してくれました。その当時、私の両親は江西省で働いていました。彼の父は文化大革命以前、衛生部の副部長でしたから、その当時は同じ江西省の看護学校で働いていました。それで夫は両親を訪ねて行くときは南昌で降りたので、私たちはそこで初めて会いました。会ったらもう一目惚れで……(笑)。

は父が二度目の失脚中でした。私は学校は卒業したんですけども、勤め先はありませんでした。それで、どこにも行けないでいたから、人民解放軍の総参謀部が職を与えてくれたのです。私は軍隊の仕事ではなく、全国人民代表会議の仕事をしてきましたけれど、人民解放軍が私にとっては恩恵を与えてくれましたので、それには感謝しています。

——ところで、香港とか西側で「太子党」(高級幹部の子弟を揶揄した表現)という言い方がありますが、これについてどう思いますか。あるいはお父さんはどう見えていますか。

毛毛 それはヨーロッパあるいは香港のマスコミの見方で、これは実情に合わないと思います。現実には、能力さえあれば高級幹部になれますし、能力がなければどんな出身でも無理だと思えます。真理の前にはみんな平等です。

——続巻のことについてお訊ねしたいのですが、すでに資料集めなどに取りかかっていると聞いておりますが……。

毛毛 ええ、もう取りかかっています。上巻(訳書のI・II巻)でだいぶ勉強になりましたので、今度はもう少し面白くまとめられるのではないかと考えています。上巻は三年ほどかかりましたが、下巻は身近で起こった出来事も多いので完成までにはこれから一年くらいで書けるでしょう。

——下巻は少し書き方も変えられるとか。

毛毛 そうなんです。上巻は時間の流れにしたがって書いたわけですが、下巻は時間の流れよりは事件を重視していくつもりです。新中国建国(一九四九年十月)以後の父の激動の

生涯がエピソードごとに描かれるはずで、ありがたいことに、みなさんが上巻も面白いが、下巻はもっと面白くなるでしょうね、と言ってくれます。日本の読者の方も二年後には徳間書店から出版される下巻を読んでいただけるでしょう、きっと、また。

——ところで、上巻は日本以外にはどの国で出版されるのですか。

毛毛 香港では同時出版されました。台湾や韓国でも出ました。英米など英語圏とは契約もすんで翻訳中です。現在契約の話合いが進んでいるのが、ドイツ、フランス、イタリア、フィンランドなどです。いずれ世界中で各国版が出版されるでしょう。

*

——鄧小平さんの平均的な一日の過ごし方は……。

毛毛 朝七時頃起きて、自己流の体操でゆっくりと体をほぐし、それから朝食、午前中は十数紙の新聞に目を通します。世間の情報は父に訊けばいい、と家族は言います。スポーツ、とくにサッカーが好きで、昨日の試合はどこが勝ったかなどよく知っています。午後には孫たちが学校から帰りますので、お相手をしてくれます。時には、江沢民総書記、李鵬首相、朱鎔基副首相たちが重大な問題についての指示を求めて訪ねてくることもありすが、一応のアドバイスを与えて、あとは三人の判断に任せているようです。また、夜は、ブリッジ仲間とブリッジを楽しみます。

「対談を終えて」

矢吹 晋

私は中国の経済学者たちとは幾度か対談や対話をしている(印象深いのは、呉敬璉教授、熊映梧教授、童大林教授などである)。しかし、毛毛さんは若い女性であり、しかも「皇帝の娘」に近い人物であるから今回はいささか緊張した。実は一九九二年十一月に日中外交正常化二十周年記念行事の一環として、毛毛さんは来日しており、そのとき誰かに、彼女たち中国代表団の中央サークルのところへ連れていかれ握手したことがある。インタビュ―前日、テレビ(NHK朝七時)で見た毛毛さんは、顔立ちの大造りな、かなりの美人であり、この点でもいささか気おくれした。しかし、ホテル・オークラの一室に、予定より十分遅れて現れた素顔に近い彼女は、画面の彼女とは別人のように清楚な、いわば書齋で執筆中の新進女流作家のイメージであった。

インタビュ―は、私が本誌編集部と相談して用意した質問項目にしたがって行われた。通訳の時間を含めて一時間半の予定なので、執筆の意図あたりから始めて、ゆっくり聞いていく作戦をたてた(当初から意地の悪い質問をして、インタビュ―拒否になると困るので)。しかし、有名人だけにマスコミの取材申込みが殺到し、予定より十分早く切り上げたので、最後に用意していたいくつかの質問は、尻切れトンボ、不発に終わった。同席したのは譚大平氏(中国国際友好連絡会重慶州部長、早大留学、譚啓龍氏子息)、農軍さん(華越商業有限公司総経理特別助理、故陳毅元帥の娘、幼名は珊瑚。毛毛とは中南海で家が隣りあっていたので、幼なじみ)、そして喻杉さん(中国国際友好連絡会井公室副主任)、通訳は范復傑さん(放送教育開発センター助手)であった。

*

毛毛さんから直接聞いて確認したことがいくつかある。①弟鄧賀方の夫人の名を私は「わが父・鄧小平」の家系図(訳書Ⅱ、四一六頁)で「劉曉原」と書いたが、これは「劉曉元」だと教えてくれた(発音は同じ)。②夫の賀方の現職を「解放軍総参謀部装備部副部長」と書いたが、現在は同部部長に昇格し階級は少将である。彼女自身は大佐(大校)である。③「東京新聞」(三月九日付の三枚の組写真のまんなか)に「川川」(親類の子)とあるのは、叔母鄧先美(夫は張仲仁)の孫である。なお、鄧先美は祖父鄧文明と再婚して生んだ三人の娘の一番上であり、初版四一六頁の家系図の位置を修正する必要がある。

——どんな方がお相手をするのですか。

毛毛 万里など父と同じような「定年退職者」と楽しんでいます。

——賭けることは?(笑)。

毛毛 いや、賭けることはありません。

——今日はいろいろ面白いエピソードをお聞きできました。日本の読者にとって、あなたご自身とこの本がいつそう身近になったと思います。

ところで、この本(「鄧小平」、講談社現代新書)は、私が昨年の六月に出しました。あなたの本を読んで、私の書き間違いに気づいたところがありますので、その点は今後訂正しなければならぬと考えています。

毛毛 (本をめくって、張錫瑗、金維映、卓琳の写真を見て)これは間違っていないわ。(家系図で弟・鄧賀方の妻について)「劉曉原」ではなく、「劉曉元」です。

——元帥のゲンですね。それではお疲れのところ、長時間にわたって、率直なお話をしていたありがとうございます。長時間にわたって、率直なお話をしていたありがとうございます。長時間にわたって、率直なお話をしていたありがとうございます。



横浜市立大学教授。一九三八年福島県生まれ。東京大学経済学部卒業後、東洋経済新報社、アジア経済研究所を経て現職。著書に「ポスト鄧小平—改革と開放の行方」(二〇〇〇年の中国)「中国のペレストロイカ—民主改革の旗手たち」(図説・中国経済)「鄧小平」など多数。

④黒竜江省綏芬河市のハリキリ市長趙明非は、叔母鄧先群(解放軍総政治部群衆工作部長)の女婿であったが、いまは離婚した由である。

記者会見や単独インタビュ―などで、彼女は幾度も同じこと(たとえば鄧小平氏の健康問題、生活状況、趣味など)を聞かれたが、いやな顔をせずに、きちんと答えていたのは、もはや若手政治家の雰囲気であった。「太子党」批判に対する返答は、本文のとおりだが、かなりの自信家であることは、応答から読みとれよう。彼女と解放軍の関係についての話について、譚大平氏が「秘密保持」との関連を注意喚起したところ、「いや、かまわない」と断言したひとコマが特に印象深かった。なお、王瑞林氏(鄧小平井公室主任)が解放軍総政治部副主任になったあと、鄧小平井公室主任は毛毛かとの見方もあったが、井公室主任はいぜん王瑞林氏とのことである。別れ際「誤植と誤記があります」と、小著「鄧小平」を差し上げた。彼女は偶然開いた二五頁に「三人の妻」の顔写真を見て、これはいいじゃないの一言。事後に知ったのだが、小著は大陸と台湾で二種類の海賊版が出たことなので、いずれ入手して、参考までに送ることを考えている。下巻を期待しつつ。